

nochについての一考察 (重近啓樹先生追悼記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 諏訪田, 清 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007066

noch についての一考察

諏訪田 清

次の文をお読みいただきたい：

(1) „Der Hotelbesitzer meint, er könne uns ausnahmsweise das Frühstück schon um sieben Uhr servieren“, sagte Ingrid plötzlich unvermittelt, „dann haben wir morgen noch einen langen Tag vor uns!“

(Michael Münzer: Ein Wochenende am Rhein)

これは『ラインの週末』(Ein Wochenende am Rhein) という「初級読本」用の教科書の一文である。著者はミヒャエル・ミュンツァー (Michael Münzer) 氏である¹。下線を施したnochはいかなる働きをしているのであろうか。会話文の意味はおおよそ「ホテルの所有者は、私たちには特別に朝食を7時に出すと言ってくれています。そうすれば明日は長い一日を楽しむことができるわ。」といったようになるが、この意味のときに日本人にはnochはなくても何ら構わない。しかしドイツ人にはnochが欲しくなるのであろう。

今度は次の文をお読みいただきたい：

(2) Es ist warm und sonnig, und Herr Busch freut sich auf das Wiedersehen mit dem Freund. Er fährt mit der U-Bahn bis zur Station „Bayrischer Platz“, geht dann noch drei Minuten zu Fuß und klingelt an der Haustür seines Freundes.

これもある教科書の一文である²。たまたまコピーで保存していたものを読み返していたとき、下線部のnochが目にとまった。このnochはいかなる働きをし

¹ Michael Münzer、中島悠爾編『ラインの週末』。註は中島氏の担当である。

² 出典は書き落としてしまったために不詳である。

ているのであろうか。コピーをした当時、このnochはおそらく単に「更に」という意味ぐらいに捉えていたのであろうが³、はたしてそんな簡単なnochなのであろうかと気になってきた。全体の意味は単に「ブッシュさんは地下鉄で『バイエルン広場駅』まで行く、それから徒歩3分で友達の家に着き、玄関のベルを鳴らす」といったようになるのではあるまいか。換言するならば、nochは「更に」といったような意味ではなくて、(1)のnochと同じように日本人にはなくても構わないものではないかと思われてきた。

今度は次の文をお読みいただきたい：

(3) Endlich kam das Mädchen zurück, ihre Stimme klang traurig und entmüdig: „Heute geht aber auch alles schief. Meine Freundin ist schon wieder unterwegs nach Paris. Sie ist auch Stewardess bei der gleichen Gesellschaft wie ich. Ich habe dann noch gleich eine Werkstatt angerufen. Die kümmern sich um das Auto.

(Michael Münzer: Ein Wochenende am Rhein)

(1)と同じように『ラインの週末』の一文である。スチュワーデスが車の故障で困っていた。たまたま通りかかった男の好意で、彼女は自動車修理工場に連絡をとるために車で電話ボックスのあるところまで送ってもらう。電話は長かった。ようやく彼女は待っている男のところに戻ってきた。本来ならば何をさしおいても修理工場に電話をかけなければならない。ところが彼女はそうはしなかった。彼女の話によれば、先ず友人のスチュワーデスに電話をかけた。この電話が終わると、すぐに修理工場に電話をかけたとのことである。電話をかける順序は逆になったが、友人との電話が終わったらすぐに(=gleich)修理工場に電話をかけた。これは是非わかって欲しいということでIch habe dann noch gleich eine Werkstatt angerufenと言っているのであろうが、nochはどうして必要なのであろうか。(2)のnochと同じように「更に」という意味にもとれ

³ 次のdochがわからなくてコピーをしていたのである：

A (=Autenrieth): Ach, uns geht es prima. Du weißt ja, daß ich wieder geheiratet habe. Kannst du dich noch an meine Assistentin von damals erinnern? Das ist jetzt meine Frau. Sie hat dann auch Medizin studiert, und ist nun auch Ärztin.

B (=Busch): Ach, tatsächlich? Das ist ja toll! Ich kann mich noch gut an sie erinnern. Sie ist doch bildhübsch.

下線部のdochについて、現在ではその働きを説明することができる。しかし和文独訳せよと言われたら、dochを使うことは今でも思いつかない。

る。しかしnochを無視して、つまり「更に」という意味を生かさずに「私はそれからすぐに修理工場に電話をかけました。」と訳しても全くおかしくはない。否、その訳の方が自然である。つまり、日本人にはこのnochはなくても構わないのである。

では(1)(2)(3)に現れるnochはいかなる働きをしているのであろうか。この3つの例文に現れるnochを考えながらnochにかすかな光をあてる、それが本稿の目標である。

(1)(2)(3)の例文を仔細に検討してみよう。するとそこには直ちにある共通なことが認められる。先ず(1)である：

(1) „Der Hotelbesitzer meint, er könne uns ausnahmsweise das Frühstück schon um sieben Uhr servieren“, sagte Ingrid plötzlich unvermittelt, „dann haben wir morgen noch einen langen Tag vor uns!“

ここではホテルが朝食を7時に出してくれるならば、そうならば(=dann)明日は長い一日を楽しむことができる、そのようになっている。

次に(2)である：

(2) Es ist warm und sonnig, und Herr Busch freut sich auf das Wiedersehen mit dem Freund. Er fährt mit der U-Bahn bis zur Station „Bayrischer Platz“, geht dann noch drei Minuten zu Fuß und klingelt an der Haustür seines Freundes.

彼は地下鉄で「バイエルン広場駅」まで行く。「バイエルン広場駅」に着いたならば(=dann)徒歩3分で友人の家のベルを鳴らすことができる、そのようになっている。

最後に(3)である：

(3) Ich habe dann noch gleich eine Werkstatt angerufen.

友人との電話が終わった後に(=dann)直ちに修理工場に電話をした、そのようになっている。

(1)(2)(3)のいずれに於いても先ずdannが現れる、そして次にnochが現

れる構造となっている。いかなる根拠から先ずdannが現れるのであろうか。そしていかなる根拠からその次にnochが現れるのであろうか。

そのためにはnochの語源を考えてみることも無駄ではあるまい。いろいろな解釈があるかも知れないが、nochの語源はnun auchであるとしよう。nunの意味もいろいろとあろうが、無難なところで「さて」であるとしよう。それを先ず(1)に当てはめてみよう。ホテルの所有者が私たちのために特別に7時に朝食を出してくれるならば、そしてそれが実現してしまえば、これがdannである。そしてその暁には、これがnun「さて」となる。次に(2)に当てはめてみよう。彼は地下鉄で「バイエルン広場駅」まで行く。「バイエルン広場駅」に着いたならば、これがdannである。そしてその暁には、これがnun「さて」である。最後に(3)に当てはめてみよう。私は友人と電話で話をしていた。話が終わったので、これがdannである。そしてその暁には、これがnun「さて」である。

次にauchについて考えてみることにしよう。auchの働きは何であらうか。よく知られているnicht nur~, sondern auch…にせよ、あるいはdenn auchにせよ、あるいはwozu auchにせよ、auchは出来事の展開によって当然現れるもの(こと)を教示する、と捉えることができるであらう。

それではnunの場合と同様にauchを先ず(1)に当てはめてみよう。ホテルの所有者が私たちには特別に7時に朝食を出してくれるならば、それが実現してしまえば(=dann)、その暁には「さて」(=nun)当然長い一日が私たちの前に拡がることになる。これがauchである。次に(2)に当てはめてみよう。彼は地下鉄で「バイエルン広場駅」まで行く。「バイエルン広場駅」に着いたら(=dann)、その暁には「さて」(=nun)当然(あるいは:計算上)徒歩3分で友人の家に着くことになる。これがauchである。最後に(3)に当てはめてみよう。私は友人と電話で話をしていた。話が終わったので(=dann)、その暁には「さて」(=nun)当然すぐに修理工場に電話をかけることとなった。これがauchである。

(1)(2)(3)においては先ずdannが現れ、次にnochが現れる。そしてそれが根拠のあることであることを見てきた。dannはnochを導き出すための語、謂わば導入語であったのだ。そしてdannによって示された出来事は、nochの構成要素の一つであるnunによって受け止められ、もう一方の構成要素のauchによって当然現れるべきことに展開していった、このような構造になっている。あることが完了してしまったならば(=dann)、その後の展開からして当然現れる

べきと考えられることがnochによって示唆されるのである⁴。

nochが出来事の展開からして当然現れるべきと考えられることを示唆するとするならば、それはいかなることなのであろうか。それは何よりも先ず話し手あるいは書き手にとって関心のあることであると言わなければなるまい。(1)のdann haben wir morgen noch einen langen Tag vor unsに於いては、男をだますことを企んでいるスチュワーデスにとって逢瀬を楽しみたいと見せかけるためにも一日が長くなることは限りなく嬉しいことであり、そのことが最大の関心事として忽ちのうちに彼女の脳裡に浮かんでくる。(2)のEr fährt mit der U-Bahn bis zur Station „Bayrischer Platz“, geht dann noch drei Minuten zu Fuß…に於いては、地下鉄で「バイエルン広場駅」に着いてしまえば、残りはあと徒歩3分であることが最大の関心事として忽ちのうちに彼の脳裡に浮かんでくる。(3)のIch habe dann noch gleich eine Werkstatt angerufenに於いては、友人との電話が終わればすぐに修理工場に電話をかけなければならないことが最大の関心事として忽ちのうちにスチュワーデスの脳裡に浮かんでくる。

nochはこのように話し手あるいは書き手にとって、あることが最大の関心事であることを示唆する。これは筆者の創見ではない。関口存男氏の解釈である。関口氏は、noch gestern (つい昨日)、noch im vergangenen Jahre (つい昨年)、noch im 19. Jahrhundert (つい十九世紀の頃まで)等のnochについて注目すべきことを述べている。長いが引用しよう：

⁴ dann…nochの他にnun…nochも用いられるようだ。わずかに1例しか集めることができなかった。次の文例を見られたい：

Eines Tages fiel es Carlo auf, daß Geronimo vollkommen aufgehört hatte, von seinem Unglück zu reden. Bald wußte er, warum: der Blinde war zur Einsicht gekommen, daß er nie den Himmel, die Hügel, die Straßen, die Menschen, das Licht wieder sehen würde. Nun litt Carlo noch mehr als früher, so sehr er sich auch selbst damit zu beruhigen suchte, daß er ohne jede Absicht das Unglück herbeigeführt hatte. (Arthur Schnitzler: Der blinde Geronimo und sein Bruder)

nun…nochが使われている根拠は十分に首肯できる。nunはここでは前文を受けている。つまりある意味ではdannと同じ働きをしているのである。この文のnochは単に比較級を強めているだけではないのかという反論が出るかも知れない。しかし比較級を強めるのにいかなる根拠からnochが使われるのかを明らかにしなければならない。比較級を強めるnochとして、関口氏は次の例を挙げている：

Die Natur ist geheimnisvoll, aber unser eigenes Herz ist noch geheimnisvoller.

(関口存男著『高等獨逸文典』167頁)

先ずDie Natur ist geheimnisvollが現れる。そして次にnochが現れるのである。

ここで参考になると思われるdannの用例を挙げておこう。関口氏は次のような例を挙げている：Wir arbeiteten den ganzen Tag in der Fabrik, kamen müde und schläfrig nach Hause, aßen zu Abend und gingen dann zu Bett.

(関口存男著『標準獨逸文法』47頁)

…このnochの現はれて来るのは、現在完了とか過去とか、とにかく広い意味に於ける過去の文脈の中であつて、その文脈の中に挿まつて、nochは、その過去が『最近』であり、意識と關心とに『近い』ことを意味するのです。

『意識と關心』に近いと云つたのには、一寸理由があります。日本語の『つい…』といふ言葉の論理機構をよく考へれば自然わかることですが、一たい近いとか遠いとか云ふ判断は、『科學的』に考へると凡て相對的な問題になつて來ます。何故相對的になつて來るか？——これは哲學上の大問題ですが、Heideggerの哲學のある今日に於ては、少くとも次に述べるやうなKritikが成立します。(私は、Heideggerの功績の最も顯著なるものは科學的であつた哲學を『存在學的』(ontologisch)な哲學にしたのと、それから、もう一つは、それがKant以後の一大Kritikである點にあると信じてゐます。)それは即ちHeideggerの所謂Sorgestruktur(關心構造)の顯れであるところのものを、即ちZeitlichkeitから發してゐるものを、科學的概念を以て律しようとする、すべてが(當然の酬いとして)『相對的』になつて來る。『近い』『遠い』はZeitではなくてZeitlichkeitを云ひ表はす概念です。それをZeit(數學的概念、或ひはBergsonのいはゆる空間單位的に考へた、空間的思惟から生れる何分とか何秒とかいふ其の「何」です。)で考へようとするとお門違ひになつて、近い遠いは結局『相對的だ』といふことになつて來る。宇宙全體だつて、物質の最後の問題だつて、これは結局Heideggerの所謂räumliches Da、即ちSorge-Strukturから來る概念(現象)なのであるから、それを自然科學で律しようとしたから、當然相對性を帶びて來るのは初めからきまつてゐます⁵。

関口氏は、また次のようにも述べている：

ドイツ人の『時間的關心』といふ奴は、さすがはHeideggerを生んだ國だけあつて、(Heideggerの„Sein und Zeit“の第一卷の一番おしまひの所を見ればわかりますが、かれは、『關心』といふ中心から見ると、未來も過去も結局何の相違もない渾然たる現在[近さを持つもの]だと見てゐる。)ドイツ語では、それが未來たると過去たるとを問はず、とにかくSorgenähe(關心への近さ)を有してゐるものは兩方ともnochで云ひ現はすといふ、非常に原始的な、非科學的な、その代り猛烈に人間的な(daseinsmäßig)考へ方をするの

⁵ 関口存男著『獨逸語學講話』222-223頁

です⁶。

筆者の学力ではHeideggerの„Sein und Zeit“を読むことなどできない。またその内容を理解することもできない。但し、関口氏の助けを借りることによって、nochが意識と関心に近いことを示唆している、このことだけは辛うじて理解することができる。平たく言えば、意識と関心に近いという場合には、過去とか未来とかいったものがなくなって凡て現在という時点に於いて脳裡に捉えることができる、このように見なすことが許されると思われる。

それは当然であろう。話し手あるいは書き手は現在という時点にいる。これは絶対に避けられ得ない。話し手あるいは書き手の意識と関心に近くなっていることは、それが過去に於いて生じたことであろうとあるいは未来に於いて生じることであろうと、現在という時点で生じているように話し手あるいは書き手には感じられるであろう。つまり非科学的なわけである。

蒐集した例文がないので、関口氏が扱っているいくつかの例文の中から一つをとりあげて、それに対する関口氏の優れた註釈を紹介しよう：

(4) Winckelmann betrachtet die Geschichte der griechischen Kunst als eine Folge typischer Stile, die jeder eine gesammenschliche Seelenlage symbolisch zum Ausdruck bringen — eine Auffassung, die noch Wilamowitz verfochten hat.

(H. Cysarz: Literatur als Geistesg. 124.)

ヴィンケルマンは、ギリシヤ藝術史をば、その各々が全人的心境を象徴的に表現してゐる典型的な様式の一系列と見てゐる——この観方は、つい最近にもヴィラモヴィッツが支持してゐる。

[註] このnochは、Wilamowitzの支持が今なほ世人の記憶に新たなること(即ち意識への近さ)を匂はさんとするのです⁷。

die noch Wilamowitz verfochten hatは、現在完了、広義に解釈すれば過去の文ではあるが、その影響がまさしく現在にまで及ぶところの機能を持つ現在完了であることによって、更にnochが使われていることによって、ヴィンケルマンの見方をヴィラモヴィッツが支持していたことが書き手にとって意識と関心

⁶ 関口存男著『獨逸語學講話』225頁

⁷ 関口存男著『獨逸語學講話』227-228頁

に近いものとなり、現在のことと感じられているのである。そのことは、nochが副文内に於いて可能な限り前方に位置していることから認められる。

例文(4)は広義に於ける過去の文に現れるnochであるが、今度は未来の文に現れるnochについて考えてみよう。ここでも蒐集した例文がないので、DudenのDas große Wörterbuch der deutschen Spracheに載っている次の例文を借用することにする：

(5) Das wirst du noch bereuen.

このnochはよく知られており、同じような例文が文法書や辞典に載っている。関口氏の訳語を借りるならば「いづれ」(ママ)の意となる⁸。全体の意は「それをお前はいずれ後悔するであろう。」となろう。ここでも出来事は確かに未来の一時点で生起するのであるが、nochの働きによって話し手にとってはまるでこれから忽ちのうちに生起するかのようと思われるのである。それは聞き手にとっても同じである。聞き手は当事者であるが故に、聞くや否や瞬時にして後悔することを強いられるであろう。

ここで非常に興味深いnochをとりあげることにして：

(6) In Kapitel 1 meiner Arbeit verfolge ich Brechts Laufbahn bis zur „Dreigroschenoper“. Welche persönlichen Erfahrungen bestimmen die Richtung, die er mit seinen Werken einschlägt? Dies ist notwendig, um zu einem tiefer gehenden Verständnis von Brechts Werk zu gelangen. In Kapitel 2 untersuche ich anhand von Brechts Dramen-Theorie und den Argumenten seiner Kritiker das „epische Theater“ bzw. den „V-Effekt“. Bei der Gelegenheit wird auch ganz allgemein die Lage des Theaters im frühen 20. Jahrhundert erläutert. In Kapitel 3 betrachte ich konkret am Beispiel der „Dreigroschenoper“ die Wechselbeziehung zwischen Theorie und Praxis. Am Schluss noch einige Gedanken zur Rezeption von Brechts Theatertheorie und ihrer Bedeutung heute.

これは一人の学生が2011年1月に提出した卒業論文に付されたレジユメの最終個所である。レジユメは、原則として本学のエッゲンバルク(Thomas

⁸ 関口存男著『獨逸語學講話』228頁

Eggenberg) 氏が目を通してゐる。

下線を施したnochにはいかなる訳語を与えたらよいのであろうか。あるいはこのnochには適切な訳語を見つけることができないのであろうか。Am Schluss noch einige Gedanken zur Rezeption von Brechts Theatertheorie und ihrer Bedeutung heuteが卒業論文制作者の意識と関心に近いものとなっていることはわかる。しかしいかなる理由から einige Gedanken以下のみが制作者の意識と関心に近いものとなっているのであろうか。それを解決するための手掛かりをどこに求めたらよいのであろうか。そのためには上で論じた(1)(2)(3)を再考することも無駄ではあるまい。(1)(2)(3)にはdann(…)nochというパターンが共通して認められることを指摘した。そのパターンを(6)にも見いだすことはできないのであろうか。ここに於いては確かにdannは現れてこない。しかしdannがあると考えることはできるのではなからうか。ここでは卒業論文の構成が述べられているのである。第一章では『三文オペラ』までのブレヒトの経歴が扱われることが知らされる。そして第一章が終わると第二章に移る。第二章ではブレヒトの「叙事演劇」が扱われることが知らされる。第一章と第二章の間にはdannは現れてこないが、そこにdannがあると仮構しても構わないのではあるまいか。つまり第一章が終わると、これがdannであり、第二章に移るというように。以下同じように考える。第二章が終わると、これがdannであり、第三章に移る。第三章では『三文オペラ』を手掛かりとして理論と実践の交替関係——門外漢には何のことかわからない——が扱われることが知らされる。第三章が終わると、これがdannであり、Am Schlussとなっていることから最終章であることが知らされる。ここにAm Schluss nochの形でnochが現れる。そして「ブレヒトの演劇理論の受容と今日に於けるその意義について」が制作者の意識と関心に近いことを知るに至る。

この卒業論文は大きく二部から構成されているのである。第一部は第一章、第二章、第三章から成り、大まかに言ってブレヒトの経歴と彼の演劇理論について論じられる。そして第二部は最終章のみで成り立ち、ブレヒトの演劇理論が今日に於いてどのように受け容れられてきたかが論じられる。

卒業論文制作者は第一部に於いてブレヒトの経歴と彼の演劇について論ずるが、そのことを論ずる以上、この偉大な劇作家が今日の演劇にいかなる影響を及ぼしているか、そのことも直ちにどうしても述べなければならない、と彼は考える。そしてそれは今という時点を逃してはならない。それがnochとなって現れてきているのである。 einige Gedanken zur Rezeption von Brechts Theater-

theorie und ihrer Bedeutung heuteが制作者の意識と関心に近いものとなってきたのである。

(6) と同じようなnochは、次の文にも現れている：

(7) … „Was soll aus uns werden? Wie können wir unsere armen Kinder ernähren⁹, da wir für uns selbst nichts mehr haben?“ „Weißt du was, Mann“ antwortete die Frau, „wir wollen morgen in aller Frühe die Kinder hinaus in den Wald führen, wo er am dicksten ist: da machen wir ihnen ein Feuer an und geben jedem noch ein Stückchen Brot, dann gehen wir an unsere Arbeit und lassen sie allein. …“

(Grimm: Hänsel und Gretel)

飢饉から逃れるためにヘンゼルとグレーテルを森の奥深くへ連れて行くことを母親は提案する。森の奥深くに着いたら、二人が暖をとるために焚き火をしてやらなければならない。しかしそれだけでは不十分である。食事を与えてやらなければならない。さもなければ二人はすぐに死んでしまう。寒さと飢え、この二つがペアになっている。寒さから子供の身を守ってあげるために、母親は焚き火をしてやらなければならないと考える。するともう一方のこと、飢えから子供の身を守ってやらなければならないことが当然のこととして直ちに母親の脳裡に浮かんでくる。忽ちのうちに彼女の意識と関心に近いものとなってくる。今という時点を最後の時点として。これが…und¹⁰ geben jedem noch ein Stückchen Brotのnochである。

あることが話し手あるいは書き手の意識と関心に近くなるのは今という時点

⁹ Wie können wir unsere armen Kinder ernähren?のarmについて一言述べておきたい。このarmは「かわいそうな」という意味ではなくて「大事な」「大切な」というふうに解してはいかがであろうか。どうしたら我々の大事な子供たちを食べさせていくことができるのであろうか、というように。数行下に次のようにarmが使われている：

„O du Narr,“ sagte sie, „dann müssen wir alle viere Hungers sterben, du kannst nur die Bretter für die Särge hobeln,“ und ließ ihm keine Ruhe, bis er einwilligte. „Aber die armen Kinder dauern mich doch,“ sagte der Mann.

このarmは「大事な」というように捉えたら、「かわいそうな」よりもはるかに分かりやすい。かかるarmは、例えば『美女と野獣』の独訳には頻出する。詳細については、関口存男著『独逸語大講座』第5巻102-103頁を参照されたい。

¹⁰ undは決して過小評価してはならない単語である。関連性があると考えられるもの（或いは：こと）を直ちに付加する。ここでは焚き火をしてやることとペアになっている、即ち関連性があると考えていることが直ちに付加されることをundが示唆している。

であって、それ以後のいかなる時点にもあり得ない。この機能は、これまで扱ってきたnoch——心態詞に移行しつつある過渡的なもの——の源である副詞としてのnochに既に認められている。それは当然のことである。

次の例を見られたい：

(8) Noch sind die Kastanienbäume dort winterlich grau, bald aber werden die feuchten, farbigen Knospen sich zeigen.

まだ今のところは彼處の栗の樹も冬めいた灰色をしてゐるが、やがては濕つばい、彩られた蕾が見え初めるだらう。

(9) Noch bin ich krank, aber in acht Tagen kann ich bestimmt wieder im Büro sein.

いまはまだ病気だが、一週間もすればかならずまた事務所に出入れる。

(8)は関口氏の例文¹¹、(9)は岩崎英二郎氏の例文である¹²。(8)に於いては「まだ今のところは…してゐるが、やがては…」となっている。他方(9)に於いては「いまはまだ…だが、一週間もすれば…」となっている。いずれの例に於いても「いま」がある出来事の限界であり、その後はそのことが言えなくなることを見てとることができる。

副詞nochが心態詞nochに移行する、これを岩崎氏は「進化もしくは退化」と捉えている。このことについては岩崎氏の優れた解釈に譲るとして¹³、次の例を見られたい：

(10) Eine Ziege fiel hinter die Herde zurück und sah, als sie ganz allein war, daß ihr ein Wolf folgte. Sie blieb stehen und sagte:

»Wolf, ich weiß, dir läuft das Wasser im Maul zusammen, weil du mich bald mit Haut und Haaren verschlingen wirst. Aber wenn ich schon sterben muß, dann

¹¹ 関口存男著『獨逸語學講話』245頁

¹² 岩崎英二郎著「補足疑問文に用いられるdochとnoch」(『ドイツ語の副詞・心態詞研究』所収 418頁)

¹³ 岩崎英二郎著「補足疑問文に用いられるdochとnoch」(『ドイツ語の副詞・心態詞研究』所収 419頁)

尚、更に同書の417頁から419頁にかけても参照されたい。加えて福島由紀子著「nochをめぐる考察——岩崎英二郎講演会記録」の277頁から278頁も参照されたい。文の前域(Vorfeld)に位置するnochについて興味深いことが述べられている。

erfülle mir noch einen letzten Wunsch. Spiele mir auf der Flöte ein Lied, zu dem ich tanzen kann!«

(Fabeln von Äsop, deutsch von Heinz Fischer)

下線を施したnochは、いかなる意味なのであろうか。ここでも wenn ich schon sterben muß, dann というように、先ずdannが現れることに注目したい。dannがnochを導き入れている。「どうせ死ななければならないのならば」¹⁴、そうならば (= dann) 今を最後の時点としてヤギの意識と関心に近いものが現れてくる (= noch)。そしてそれが「私の最後の願いを叶えて下さい」であることを読み手は知るに至る。すぐに死ななければならないとわかっているときには、最後の願いは直ちに叶えてもらわなければならないまい。(その意味で「最後の」の意のletztと「今を最後の時点として」の意のnochが併用されていることは興味深い。) 既に(1)(2)(3)のnochに「忽ちのうちに」の意が認められることを指摘したが、(10)のnochには「忽ちのうちに」とは微妙に異なる「急いで」とか「直ちに」の意が認められると思われる。関口氏は非常に興味深いことを述べている。長いのが次に引用する：

此のnoch(間際を指すnoch——筆者註)の譯語としては、『やつとの事』なぞが最もびつたり色彩を寫すだらうと思ひますが、それを『まだ間に合つた!』と考へて御覽なさい。さうすれば、その『まだ』がnochです。『まだやつとの事に間に合つた』のだから、それを『まだ』(noch)だけで表現すると思へば氣持がわかりませう。

それから、これは前に述べたnoch heute abend(今晚にも)のnochにも共通な現象で、その點で、唯今問題になつてゐるnochとnoch heute abendのnochとの間には、ほんの一寸した程度の差しか無いのですが、これらのnochは日本語では『もう』といふ表現をします。つまりnoch(まだ——間に合つた)といふ肯定の語をnicht mehr(もう——間に合はない)といふ否定の語で表現しようといふのが日本語の要求です。たとへばnoch heute abendを、『もう今晚にも』、noch in diesem Augenblickを『もう今にも』と云つて、『もう』(schon又はnicht mehrに當る)といふ微妙なPartikelchen(助詞)をつけ

¹⁴ schonは「どうせ」と訳すことができる。この点に関しては岩崎氏の『「せっかく」と「どうせ」——心態詞schonの一用法』を参照されたい。(『ドイツ語の副詞・心態詞研究』所収468頁以下)

加へる。日本語のかうした意識は、動もすると我々の作る獨作をまでも支配して、『もう今晚にも立つ』といふのを *ich reise schon heute abend ab* と云はせる。さう云つても決して間違ひではありませんが、それでは *noch* 程の力がこもりません。『もう立つのか？ 随分早いな』といったやうな氣だけしかない。 *Ich reise noch heute abend ab* と云つて始めて、 *noch* の力で、急き立てられるやうな、ドキツとするやうな氣配が肌身に迫るといふわけです¹⁵。

注目すべきことが述べられている。 *noch heute abend* (もう今晚にも) と *noch in diesem Augenblick* (もう今にも) における「もう」の *noch* は、関口氏によれば「*schon* 又は *nicht mehr* に當る」ことになる。これは何を意味するか。それが意味するところは、今という時点が最後の限界である、ということに他なるまい。そしてここから関口氏の言う「急き立てられるやうな、ドキツとするやうな氣配が肌身に迫る」働きを *noch* に認めることができるのである。このことを踏まえるならば、(10) における *noch* の働きは一層はっきりしてくる。 *Wenn ich schon sterben muß, dann erfülle mir noch einen letzten Wunsch* であるから、 *noch* によって聞き手のオオカミはヤギの最後の願いを今という今直ちに叶えてやらなければならないという氣持に襲われるであろう。「急き立てられる」であろう。

noch のかかる機能は *Wie hieß er noch?* の *noch* にも認められる。彼は何という名前であったのか、そのことが今という今を限界として話し手の意識と関心に近くなっているのである。彼の名前を思い出したい——これは今を最後の時点とする——という氣持が話し手に迫ってくる。彼の名前を思い出したいと話し手は急き立てられるのである。

このような「彼の名前は何だったっけ。」といった場合について、岩崎氏は次のように述べている：

…一時的にど忘れしたことを思い出そうとするというきわめて特殊な文脈で用いられる典型的な心態詞は、本来は *noch* ではなく *doch* である…¹⁶。

かつて *Wie hieß er noch?* について論じた際に、 *Wie hieß er doch gleich?* の

¹⁵ 関口存男著『獨逸語學講話』219頁

¹⁶ 岩崎英二郎著「*Wie hieß er noch?*」(『ドイツ語の副詞・心態詞研究』所収 58頁)

doch gleichがいかなる根拠から用いられているのか説明できない旨を述べた¹⁷。しかし2年前にカフカの『変身』(Die Verwandlung)のある箇所を扱った小論の中でdochの方には触れることができた。詳しいことはそちらに譲るとして¹⁸、関口氏に従ってdochがeigentlich(元来)の意であるとする¹⁹、gleichを伴わないWie hieß er doch?のdochは次のように説明できるであろう：

「第一段階」 彼の名前は某某である。

「第二段階」 彼の名前を忘れかけてしまうということに脱線する。

「第三段階」 忘れかけている彼の名前を思い出すことによって、脱線から元来のことに戻ろうと必死になる。頭の中が焦った気持ちに占拠される。

Wie hieß er doch?のdochをこのように捉えると、「彼の名前は何だったっけ。」のような場合には、本来はWie hieß er noch?ではなくてWie hieß er doch?の方であるとする、先の岩崎氏の註釈はその正しさを証明することができるであろう。岩崎氏が述べているごとくWie hieß er doch noch?ということも可能である²⁰。話し手は彼の名前を忘れかけているという脱線から元来のことに戻ろうと必死になっている。それは先ずdochによって表される。そしてnochによってそれが今を最終時点としていることが知らされる。

¹⁷ 諏訪田清著「Wie hieß er noch?について」(『佐藤自郎教授還暦記念論文集 独逸文学論文集』所収 376-377頁)

¹⁸ 諏訪田清著「カフカ作『変身』の翻訳をめぐる」(『静岡大学人文学部人文論集 第60号の2』所収 112-113頁)

¹⁹ 関口存男著『独逸語大講座』第6巻 111頁。尚、関口氏による次の註釈も参考になるであろう：倒置法とdochの構造。これは普通は一種の感嘆文になる (Ist es doch ein schönes Wetter! 何と美しい天気ではあるまいか)。

(関口存男著『マルティン・ハイデッゲルと新時代の局面』7頁)

下線部のdochにはeigentlichの意が色濃く残っている。

²⁰ 蒐集した文例はわずか1つに過ぎない。一方、岩崎氏はたくさんの文例を挙げている。ここに岩崎氏の凄さがある。尚、岩崎氏はWie hieß er doch?について傾聴すべきことを述べている。Hermann PaulのDeutsches Wörterbuchの第10版にミスがあったのである。第9版のdochの項にシラーに宛てたゲーテの書簡の中からWie heißt doch der Titel der Bearbeitung der Adelphehen?が引用されている。ここはheißtという現在形で正しいのだが、第10版ではWie hieß doch der Titel der Bearbeitung der Adelphehen?と誤って過去形になっている。(「書評 Hermann Paul: Deutsches Wörterbuch」ドイツ文学115 160-162頁)

いやしくも初歩的なミスには充分気をつけなければならない。関口氏の『独作文教程』の独訳が刊行された。非常にすばらしい、敬意を表すべき仕事であるが漢字の読みミスがある。「醜肥辛甘は眞味に非ず、眞味は只だ是れ淡、神奇卓異は至人に非ず、至人は只だ是れ常」の「醜」は「のう」と読まれているが、それは誤りで正しくは「じょう」と読む。(関口存男著『独作文教程』151頁)。因みに、これは諸橋轍次氏の『大漢和辞典』にあり、『菜根譚』の一節である。

以上、あることが話し手の意識と関心に「忽ちのうちに」近くなっている働きをするnoch、そしてあることが話し手の意識と関心に「急き立てられる」ように近くなっていく働きをするnoch、この二つを検討してきた。nochに認められるこの二つの機能は、いずれも時間的な面を持っている。では次の例はいかがであらうか：

(11) Arm in Arm wanderten sie zu ihrem Hotel zurück und nahmen auf der Terrasse Platz, wo auf den Tischen die Windlichter flackerten. Die frische Landluft und der Spaziergang hatten sie richtig hungrig gemacht und das herzhafte Essen schmeckte ihnen ausgezeichnet. Das Rauschen der Kastanienbäume über ihnen und die von ferne leise klingende Tanzmusik machten ein Gespräch fast überflüssig. Nach dem Essen saßen sie noch lange Hand in Hand und nippten zwischendurch an ihren Weingläsern.

(Michael Münzer: Ein Wochenende am Rhein)

下線を施したnochはいかに解したらよいであろうか。ここではdann (…)
nochという形ではないが、Nach dem Essen … nochという形が認められると考えるべきであろう。つまりdann (…)
nochが存在していると見なしてよろしい。腕を組んでホテルのテラスに戻ってきた二人(クラインシュミット氏とスチュワードス)は、その場所で夕食をとることになる。そして夕食が終わると(=Nach dem Essen)、nochが現れる。作者はnochによって、食事を済ませた二人はその後に何をしようかということに読者を誘導しているのである。それは今という時点を限度として読者の皆さんに是非考えてもらいたいということである。読者はまるで「急き立てられ」ているようだ。そして読者は二人が長いこと手と手を取り合ってワインを飲んでいたことを知るに至る。この光景ならば読者の皆さんも納得して下さると思います、そんな気持がこのnochには込められていると考えてよいのではあるまいか。

ここに至ってnochは時間的側面と同時に気持の側面がだんだん入ってきた。今度は次の例である：

(12) Da er plötzlich eine gewisse Nervosität bei ihr zu spüren glaubte, fragte er sie, ob sie schon müde sei. Sie verneinte, aber sie bat: „Ich möchte trotzdem schon hinaufgehen.“ Er ließ sie vorausgehen. Als sie gegangen war, saß er noch

eine Weile wie betäubt allein auf der Terrasse und rauchte eine Zigarette nach der anderen. Zuviele Gedanken stürmten auf ihn ein.

(Michael Münzer: Ein Wochenende am Rhein)

このnochはいかに解したらよろしいであろうか。彼女が立ち去ってしまうと、彼は更にもうしばらくの間ぼんやりと一人でテラスに腰を掛けタバコを次から次へと吸っていたのであろうか。つまりnochはeine Weileのみにかかるのであろうか。そうならば彼女が立ち去る前から彼はすでにwie betäubt (ぼんやりと) していたことになる。更にはwie betäubtに続くalleinの存在を説明することができなくなる。そうではないのだ。彼女が立ち去ってしまうと(これがdannにあたると考えてよろしい。)、nochが現れる。そして彼はしばらくの間ぼんやりと一人でテラスに腰を掛けて次から次へとタバコを吸っていたということを読者は知るに至る。この事実は彼女が立ち去ってしまったということとペアになっているのである。彼女が立ち去ってしまい、その結果として彼はぼんやりと一人タバコを次から次へと吸うことになる。その折りに「溢れるほどのさまざまな思いが彼にどっと迫ってきた」のである。従って彼がしばらくの間ぼんやりと一人でテラスに腰を掛けて次から次へとタバコを吸っていたということ、これは作者の意識と関心に近い大変重要な事実なのであり、そのことを読者の皆さんには是非ともわかってもらいたい。nochはかかる作者の気持を伝える役割を担っていると考えなければなるまい。

(11) (12) にみられる、自分の気持の了解を求めるようなnochは次の例にも認められる：

(13) Sind Sie nicht beim Start gestolpert?²¹

Lang: Ja, wissen Sie, als wir gestartet sind, hat es noch geregnet. Deshalb bin ich ausgerutscht. Aber zum Glück ist nichts passiert.

(NHK ドイツ語会話 2005年8月号)

²¹ この文は「スタートでつまづきませんでしたか？」と解するよりも、「スタートでつまづいたのではありませんか」と解した方がよいのではあるまいか。この疑問文に対する返答はJaとなっている。関口氏は次のような興味深いことを述べている：ist ……nicht……? (云々ではあるまいか) wenn……nicht…… (若し……でないとするれば) damit……nicht…… (……ないように) 等の云い廻しでは、nichtはなるべく前に置くのが例である。Ist Ihr Vater nicht krank? (あなたのお父さんは„nicht krank“ですか?) Ist nicht Ihr Vater krank? (あなたのお父さんはkrankではありませんか?)。(関口存男著『マルティン・ハイデッゲルと新時代の局面』290頁)。

マラソン大会で優勝したクラウディア・ラングさんがインタビューと交わしている会話である。als wir gestartet sind, hat es noch geregnetのnochはいかに解すべきであろうか。この講座の講師である相澤啓一氏は「スタートしたときは、まだ雨が降っていました」としている。つまりnochは「まだ」である。この訳で充分意を尽くしているのであろう。しかし次のように捉えることもできるのでなかろうか。マラソンランナーにとって雨は大敵なはずである。滑って転倒することも大いにあり得る。ところがあいにくスタート時にはまだ雨が降っていた。いやだなあ、もしかして…という悪い予感が優勝者ラング女史の頭の片隅にあった。その気持が優勝者の意識と関心に近いものとなっていた。それでals wir gestartet sindと述べると(= dann)、心配だという気持がnochとなって現れたのではなかろうか。nochはこの気持をぜひわかってもらいたいと解してもよいように思われる。

次の例を見られたい：

(14) … Kleinschmidt bedankte sich für die Auskunft und hängte den Hörer ein. „Alles — nur keinen Skandal!“ dachte er sofort und zündete sich mechanisch eine Zigarette an. Er rauchte noch viel an diesem Abend und nur zwischendurch ein bißchen vor sich hindämmernd, verbrachte er die Nacht unruhig und wartend darauf, daß sie vielleicht doch noch zurückkäme.

(Michael Münzer: Ein Wochenende am Rhein)

クラインシュミット氏は夜にホテルの従業員からスチュワーデスが車で出かけた、とても急いでいる様子であった、電話で緊急の呼び出しを受けたようだということが知らされる。火遊びがばれたら大変なことになる。とにかくスキャンダルだけは絶対にはイヤだ。気持を静めるために、彼はタバコに火をつける。そこにEr rauchte noch viel an diesem Abendが現れる。このnochはいかなる働きをしているのであろうか。いかなる根拠からクラインシュミット氏がこの晩たくさんタバコを吸ったということが作者の意識と関心に近いものとなったのであろうか。これまでdann(…)noch及びその亜種のようなものを扱ってきた。しかしdannおよびそれに類したものがなくてもnochがnun auchを程度の差こそあれ反映しているのであるから、つまりnochはある意味ではペアを示唆するのであるから、ここに於いてもペアの一方である前半部があるはずである。それは「スキャンダルだけは絶対にはイヤだ。」(Alles — nur keinen Skandal!)に求

めることができるであろう。クラインシュミット氏の狼狽は大変なものだった。その結果、当然のこととして（= nun auchにあたると考えてよろしい。）愛煙家の彼はイライラを抑えるためにたくさんタバコを吸った。このことは読者の皆さんにどうしても伝えておかなければならない。クラインシュミット氏の心情をわかって下さいますよね、といったような作者のメッセージがこのnochには込められていると思われる。

次の例を見られたい：

(15) Zuviele Gedanken stürmten auf ihn ein. Was für ein verrücktes Abenteuer! In seinem Alter! Aber gerade in seinem Alter schien ihm ein solches Abenteuer ganz natürlich. Torschlußpanik? Vielleicht. Aber wenn es eine Dummheit war, dann war es doch wenigstens eine hübsche Dummheit. Einen Augenblick glaubte er noch ihr Parfüm zu spüren, aber das war wahrscheinlich eine Täuschung, oder vielmehr die Erinnerung an diesen wunderbaren Nachmittag, den er nie mehr vergessen konnte.

(Michael Münzer: Ein Wochenende am Rhein)

(12) の続きである。下線を施したnochはいかなる働きをしているのであろうか。溢れる程のさまざまな思いが彼にどっと迫ってきたと始まり、その思いが体験話法で語られる。その思いとはスチュワードとの恋のアバンチュールを正当化しようとするぜいたくな悩みであるといっても構わない。その最中に Einen Augenblick glaubte er noch ihr Parfüm zu spürenが現れる。このnochは「まだ」の意ではない。「一瞬ではあるが彼はまだ漂っている彼女の香水の臭いを感じる事ができたように思った。」と解しては誤りである。ここでもnochはペアを前提としていること、そしてnun auchの痕跡を引きずっていることを考えなくてはなるまい。体験話法で語られる彼の思い、即ち恋のアバンチュールを正当化しようとする彼の考え、これは実に笑止千万なことなのである。笑止千万なことを考えているから、一瞬のことではあるが、彼は彼女の香水が漂ってきたのでその臭いをかぐ事ができたなどと思ったのである。nochによって読者はそこに「あり得ないことだ」「滑稽極まりないことだ」といった作者の気持を読み取ることができるであろう。事実、彼が彼女の香水の臭いをかぐことはあり得ず、たぶん錯覚、否むしろ今日の午後享受した、忘れることなど絶対にできない楽しいことを思い出したのであろうという、謂わば落ちがついてい

るのである。

次の例を見られたい：

(16) … Er rauchte noch viel an diesem Abend und nur zwischendurch ein bißchen vor sich hindämmernd, verbrachte er die Nacht unruhig und wartend darauf, daß sie vielleicht doch noch zurückkäme.

(Michael Münzer: Ein Wochenende am Rhein)

この(16)は、既にとりあげた(14)の後半部分である。下線を施した doch noch はいかなる意味なのであろうか。それを考える前に、関口氏が doch noch について述べているので、先ずそれを紹介しておきたい。関口氏は次のように述べている：

doch (やはり、さすがに)の意味を強めるために doch noch といふ結合がよく用ひられます。たとへば、Es hat sich noch im letzten Augenblick herausgestellt, daß er doch der Täter war. (やつぱり彼が犯人だつたと云ふことが、最後のギリギリ決着の時になつてやつと判明した)と云へば、最初の noch は例の『際どい瞬間』を指す noch であり、doch は『やつぱり』の意ですが、この二つが斯うしたやうに用ひられるので、その結果 doch noch と云ふ表現が出来たものと見えます。

[1] Nach langem Schwanken hat er die Sache doch noch zu seinem eigenen Vorteil entschieden.

長い間迷つてゐたが、結局やはり自分に有利なやうに處理してしまつた。

[2] Das berüchtigte Hochstapler-Kleeblatt ist doch noch erwischt worden. 有名な三人組の詐欺師も結局到頭捕まつてしまつた²²。

註釈および例文について批判などする資格はない。しかし doch noch を「やはり」や「結局」とする関口氏の註釈は、該当する場合もあれば該当しない場合もあると思われる。該当するのは、言うまでもなく上の註釈と例文に見られ

²² 関口存男著『獨逸語學講話』249頁

るが、dochもnochも副詞としての側面が強い場合なのではなかろうか。Wie hieß er doch noch?の場合には該当しないことは既に見てきた通りであるが、この(16)のdoch nochも関口氏の註釈は該当しないように思われる。クラインシュミット氏は深夜(Nacht)を落ち着かないまま過ごした、ということが読者に知らされる。そしてそれにund wartend darauf, daß sie vielleicht doch noch zurückkämeと続く。ここで(14)に戻ってみよう。クラインシュミット氏は、彼女がホテルを出て行ったきりもう戻ってこない、そのように覚悟している。daß sie vielleicht doch noch zurückkämeは、ほとんど非現実話法文といえるほどのものと解さなくてはなるまい。つまりこの副文の意味は、彼女はひょっとして(或いは:もしかして)戻ってきてくれたら、というように解さなくてはなるまい。dochは、彼女が戻ってきてくれないであろうが、是非戻ってきて欲しいというクラインシュミット氏の強い気持を表している²³。勿論その強い気持もvielleichtによって弱められて、できたら戻ってきて欲しいという一縷の望みに後退はしている。しかしわずかではあろうが希望がクラインシュミット氏の頭の中を占拠しているのである。nochはクラインシュミット氏の頭の中を占拠している一縷の希望が現在を最後の時点として現実のものとなって欲しいということを示している。換言するならば、もし彼女が戻ってきてくれるならば、それは今という今が最後であるということを表している。敢えて訳すとすれば、彼は狼狽しながらそれでも彼女がひょっとして今にも戻ってきてくれるのではないかと待ち焦がれながら真夜中まで起きていた、とでもすればよいのではなかろうか。

次の例はいかがであろうか：

(17) Es waren schöne Zeiten gewesen, und niemals nachher hatten sie sich, wenigstens in diesem Glanze, wiederholt, trotzdem Gregor später so viel Geld

²³ 本文で述べているように、Wie hieß er doch gleich?のdochは「Wie hieß er noch?について」を執筆した当時、その働きがわからなかった。しかしこのdochは「確認」を行っているとの仮説を立てて、註で扱っていた。例文(16)に接した今、当時の仮説は否足らずではあるが、誤っていなかったと考える。彼女に戻ってきて欲しいというクラインシュミット氏の気持はうそ偽りのないものである。これは絶対に揺るぐことのない事実であるということ、即ち元来のことであるということ、そのことがdochによって確認されていると見なさなければなるまい。Wie hieß er doch gleich?に於けるdochは、一時的に忘れてしまった彼の名前を想い出したい、即ち元来のことに戻りたい、そしてこれこれという名前が元来彼の名前であると確認をしたいとする作業を行っているのである。dochは元来のことであると確認をする機能を持っていると言えるであろう。

verdiente, daß er den Aufwand der ganzen Familie zu tragen imstande war und auch trug. Man hatte sich eben daran gewöhnt, sowohl die Familie als auch Gregor, man nahm das Geld dankbar an, er lieferte es gern ab, aber eine besondere Wärme wollte sich nicht mehr ergeben. Nur die Schwester war Gregor doch noch nahe geblieben, und es war sein geheimer Plan, sie, die zum Unterschied von Gregor Musik sehr liebte und rührend Violine zu spielen verstand, nächstes Jahr, ohne Rücksicht auf die großen Kosten, die das verursachen mußte, und die man schon auf andere Weise hereinbringen würde, auf das Konservatorium zu schicken.

(Franz Kafka: Die Verwandlung)

グレゴールに対して一貫して絶対によそよそしい態度をとらないできたのは、妹だけであった。この事実が動かしがたいものとしてグレゴールの頭の中を占拠している。これを読者はdochによって直ちに知ることができる。グレゴールの頭の中を占拠しているために、その事実は彼の意識と関心に近くなってきている。従ってdochのみでその事実の重みは意を充分達せられるはずである。しかるにdoch nochというようにnochが付加しているのはいかなる根拠からなのであろうか。ここはグレゴールの回想シーンである。過去の出来事が現在のグレゴールによって想い出されている。意識と関心への近さを表すnochの力によって、過去の出来事が現在を最後の時点として、つまり過去の出来事がまるで今生じているかのようにグレゴールには思われているはずである。ここではNur die Schwester war Gregor doch noch nahe gebliebenというように過去完了が使われている。回想することをその働きの一つとする過去完了を補完するために、ここのnochはグレゴールによる回想を一層回想としてみせることに貢献していると思われる²⁴。

終わりにnochについての、岩崎氏の興味深い考察を紹介し、それについて述べてみることにしたい。岩崎氏がたくさん挙げている例文の中から次の2つをとりあげてみよう²⁵：

²⁴ この回想の場面は体験話法ではない。回想は作者がグレゴールに乗り移って行われてはいない。グレゴールに代わって作者が回想を行っているのである。

²⁵ Eijiro Iwasaki: Einige Bemerkungen zu *noch*. In: Sekiguchi-Grammatik und die Linguistik von heute. S. 65-72

(18) „Aber Karl, was fällt dir denn ein?“ rief Robinson und stand schon vor lauter Sorge ziemlich aufrecht, nur mit noch etwas ruhigen Knien, im Wagen. „Ich muß doch gehen“, sagte Karl, der der raschen Gesundung Robinsons zugesehen hatte.

„In Hemdärmeln?“ fragte dieser.

„Ich werde mir schon noch einen Rock verdienen“, antwortete Karl, nickte Robinson zuversichtlich zu, grüßte mit erhobener Hand und wäre wirklich fortgegangen, wenn nicht der Chauffeur gerufen hätte: „Noch einen kleinen Augenblick Geduld, mein Herr!“

(Franz Kafka: Der Verschollene, Ein Asyl)

(19) „Es ist erst so groß“, entschuldigte sich Meta und zeigte mit den Händen, wie klein das Kind war.

„Es wird schon noch wachsen“, tröstete Labude. Die Frau blickte ihn dankbar an und hängte sich bei ihrem Mann ein.

(Erich Kästner: Fabian, Die Geschichte eines Moralisten, 7. Kapitel)

下線を施した schon noch はいかなる働きをしているのであろうか。岩崎氏は schon と noch は schon noch という順序 (Reihenfolge) で現れるとしている。そして岩崎氏は、schon noch は一つのまとまった形で心態詞としての働きをしていると取りあえず仮定できる、と慎重に述べている²⁶。

schon noch は心態詞として見なしても構うまい。schon はこれ以上何も先に進まない、という意味であろう。そして noch はこれ以上 (或いは: 今以上) に何も進まなくても、あることが意識と関心に近くなって、つまり今という時点を最後の限界として話し手あるいは書き手の脳裡に現れてくることを意味しているのであろう。noch については相当論じているのでこれ以上説明を加える必要はあるまい。schon についてであるが、これ以上何も進まないという意味を広く捉えればよろしい。(18) の Ich werde mir schon noch einen Rock verdienen に於いては、In Hemdärmeln? (上着を着ないでシャツのまま?) と訊かれたので、schon の「これ以上何も進まないで」を「それについてはおっしゃる通りです。」とか「ご指摘はごもっともです。」とか「反論する考えは毛頭ありま

²⁶ Eijiro Iwasaki: Einige Bemerkungen zu *noch*. In: Sekiguchi-Grammatik und die Linguistik von heute. S. 69

せん。」と考えればよいのではあるまいか。このように考えると、schonはカールの気持の発露であると見なすことができる。つまりschonは心態詞となってくる。そしてその気持がカールの頭の中を占拠している。カールのこの気持は、おそらくschonだけで十分に表され得ると思われる。nochは話し手の現在の意識と関心に近いことを示すことによって、つまり現在を最後の時点として頭の中を占拠しているということを示すことによって、既にschonによって示唆された、仰せの通りに上着を手に入れるという気持をより強いものとする働きをしている、そのように考えるのが穏当なところではないかと思う²⁷。

次に(19)である。ここのEs wird schon noch wachsenについても(18)と同じように考えればよいと思われる。子供の成長が遅いので随分心配していることに対して、そんな心配をする必要はないと考える。この役割をschonが果たしている。そしてこの考え、あるいは気持が話し手の頭の中を占拠している。schonのみで充分なのであろうが、その考え或いは気持が現在いかに強いものであるかを示すために、現在という時点にいる話し手の意識と関心に近いことを示唆するnochが付加されている、そのように考えればよいのではなかろうか²⁸。

岩崎氏が挙げているschon nochはこのように捉えることができると思われる。この謂わば成句は岩崎氏の論考によって初めてその存在を知った次第で、直接目にしたことは一度もない。辞書にはこの成句は確かに載っている。例えばDeutsch als FremdspracheにはWir werden schon noch sehen, wer hier Recht hatが扱われている。「話し合うまでもなく、ここでは誰の言っていることが正しいのかわかるでしょう。」とでも訳すことができよう。つまりschon nochは「話し合うまでもなく」とでも云ったような意味なのであろう²⁹。

²⁷ schon nochとschonとの相違はどこにあるのかとネイティブスピーカーに尋ねるとしたら、彼らも適切な返答をすることが恐らくはできないであろう、と岩崎氏は述べている。(Eijiro Iwasaki: Einige Bemerkungen zu noch. In: Sekiguchi-Grammatik und die Linguistik von heute. S. 69) 尚、文例(18)に出て来るwenn nichtについては、関口氏の優れた訳がある。(関口存男著『接続法の詳細』263頁)

²⁸ 文例(18)及び(19)のschonは「大丈夫」と訳すことも可能である。関口氏はSie wird schon kommenに対して「彼女は大丈夫やつて来るだらう。」と訳し、次のように註釈を施している：つまり心配しなくても好い、大丈夫やつて来るから安心しろと云ふ事です。(関口存男著『獨逸語學講話』230頁)

²⁹ 独和辞典には次のような文例が載っている：

Er wird schon noch kommen.

そしてschon nochには「いづれ必ず」という訳が付されているが、いかがなものであろうか。

本稿は関口存男先生と岩崎英二郎先生に感謝するために書かれた。仰ぎ見るような関口先生と岩崎先生が書かれたものからどれだけ教えて頂いたか計り知れない。関口先生は泉下の客と成られたが、岩崎先生は今もお元気で研究に打ち込んでおられると人づてに聞いている。日本学士院会員の岩崎先生は私の稚拙な解釈を採り上げて下さった。真に偉大な学者にしかできないことである。それは40年間に亘ってドイツ語教師の末席を汚してきた者にもわかる。

関口先生と岩崎先生の研究スタイルは共通している。原書をたくさん読んで文例を集めるといふ手法である。この最も基本的な方法によってしかドイツ語の学力をつけることはできない。そのことを関口先生と岩崎先生から学ぶことができたことを幸せに思っている。

テキスト

Michael Münzer、中島悠爾編『ラインの週末』第三書房 1996年 第2版

Arthur Schnitzler: Der blinde Geronimo und sein Bruder

Brüder Grimm: Hänsel und Gretel

Fabeln von Äsop, deutsch von Heinz Fischer

Franz Kafka: Die Verwandlung

NHKドイツ語会話 2005年8月号

参考文献

関口存男著『獨逸語學講話』日光書院 1939年

関口存男著『標準獨逸文法』三修社 1939年

関口存男著『高等獨逸文典』三省堂 1949年

関口存男著『接続法の詳細』三修社 1968年

関口存男著『独作文教程』三修社 1994年

関口存男著『獨逸語大講座』(5)(6)(『関口存男著作集』ドイツ語学編7 三修社 1994年)

関口存男著『マルティン・ハイデッゲルと新時代の局面』尚文堂 1932年

岩崎英二郎著「書評 Hermann Paul: Deutsches Wörterbuch」ドイツ文学115 2004年

岩崎英二郎著『ドイツ語の副詞・心態詞研究』同学社 2012年

福島由紀子著「nochをめぐる考察——岩崎英二郎講演会記録」(『立教大学ドイツ文学科論集』40 2006年)

Eijiro Iwasaki: Einige Bemerkungen zu *noch*. In: Sekiguchi-Grammatik und die Linguistik von heute. Stauffenburg Verlag 2009

諏訪田清著「Wie hieß er noch?について」(『佐藤自郎教授還暦記念論文集 独逸文学論文集』名古屋大学出版会 1986年)

諏訪田清著「カフカ作『変身』の翻訳をめぐる」(『静岡大学人文学部人文論集』第60号の2 2010年)